



林雄一郎先生を源流とする
関西学院グリークラブの唱法

作曲家

多田武彦

過日、ドイツ金融界の某氏にあった。某氏は来日を機に、人を介して、私の銀行勤務時代の「人員整理をしないで、約60社を再建した時の経験談」を聴きにきた。

しかし直ぐに、彼が「クラシック音楽に精通し、ドイツ音楽こそ西洋音楽の主流」と考えているご仁であることが判った。そこで、拙宅に招き、関西学院グリークラブのCDを聴かせた処、「ドイツ音楽の正統的唱法だ」と称賛した。更に関学グリーのことを聴くので、資料をもとに私の「関学グリー讃歌」を打ち上げた。当然話は林雄一郎先生のことにも及んだ。

関学グリー80年史に詳述されている林先生の「生い立ちや、音楽との関わり合い」、特にグリーに入部後の「ドイツの合唱音楽に関するご研究」や「楽譜面上だけでなく、輸入レコード試聴を通じてのドイツ合唱音楽の真髄追求」、更に「ここを起点とする、西洋音楽の名演奏家達の秘法の探求」と「先生の主張を理解した同輩や後輩や歴代指揮者による、忠実な伝承」についての私見を述べた。

また日を変えて、親交のある北村・洲脇・亀井各氏から伺った話も伝えた。かのドイツ人は嬉しそうに納得し、「一部の好事家達は協和音の良さも知らないくせに、矢鱈と不協和音主体の現代曲を珍重がる。しかし世界中の多くの音楽愛好家は、今もバッハからストラビンスキーまでの名曲を希望し、此等の作品の律儀な構築性とそれを正しく具現する指揮者や演奏家を探し求める。林先生を源流とする関学グリーの唱法は、紛れもなく、西洋音楽の正統的継承者の音楽だ」と語り、歌曲「早春賦」のような肌寒い日本を後にした。

林雄一郎先生。合唱生活70年、おめでとうございます。いつまでも、お元気で。

お元気で。お元気で。…